

萩城下の雇用労働と瀬戸内海地域

森下徹

Hired Labor in Hagi Castle Town and Its Relationship to the Inland Sea Area

はじめに

- ①戸籍仕法と移動する労働力
- ②近世後期における萩の都市構造
- ③秋に流入する労働力

おわりに

[論文概要]

本稿は、これまで江戸を中心にして進められてきた都市社会における雇用労働の位置づけについて、城下町萩を素材にして地方都市に特徴的なあり方を考えてみようとしたものである。

まず萩藩で十八世紀後半から行なわれている戸籍仕法と呼ばれるあたらしい人別支配の方法が、十九世紀に入つて一度改革されていることに注目した。それは城下町萩への労働力の滞留が進展し、それだけを特別に規制する必要に迫られたのだとたつた。そこでの時期の城下の都市構造を概観してみると、浜崎町をはじめ、とくに外縁部で零細な借家層が増加しており、たしかに一旦は奉公人などとして萩へ流入してきたものが、そのまま借家を構えて萩に留まってしまうケースが増加していたことが確認できた。言い換れば雇用労働はそのままで城下町に展開することは不可能で、小商いなどを随伴した形で、まさしく「雑業」層としてしか存立しえなかつた」とにな

る。このことは労働力需要に限界がある地方都市にあっては必然だったと考えられる。こうした事態が十九世紀に入つて急速に進展することの要因が問題となるが、それまでのよう萩の周辺や日本海沿岸部という城下町を中心とした同心円状の供給構造が変化し、あらたに瀬戸内海沿岸部、とくに大島周辺からの流入が増大したことによる。このことは労働力需要に限界がある地方都市にあっては必然だったと考えられる。これを求めることができた。この大島周辺は各地に出稼ぎや、さらには移住する人口を近世後期になってたくさん輩出する地域に他ならなかつたが、こうした地域に労働力の供給を押さえられたことが、結果的には萩への滞留人口の増大をもたらし、ひいては都市構造の変容をもたらしたことになる。かくして日本海側に立地する萩と、そこに展開する雇用労働も、近世後期の瀬戸内海地域における経済発展に強く影響を受けることになつたわけである。